書評・紹介

吉水岳彦著『霊芝元照の研究――宋代律僧の浄土教――』

戸次顕彰

はじめに

本書は、中国宋代の代表的仏教者の一人である霊芝元照（一〇四八―一一一六）の浄土教を扱った研究書である。そして著者の吉水岳彦氏は、大正大学で研究・教育活動をされており、本書は吉水氏が二〇〇八年に大正大学へ提出した学位請求論文「霊芝元照の浄土教思想」をもとにして出版された。

大正大学の浄土学研究室といえば、特に近年、すぐれた浄土教研究者による新しい成果が続々と出版されている点で印象的である。柴田泰山氏の『善導教学の研究』（山喜房仏書林、二〇〇六）や石川琢道氏の『曇鸞浄土教形成論――その思想的背景――』（法蔵館、二〇〇九）、工藤量導氏の『迦才『浄土論』と中国浄土教――凡夫化土往生説の思想形成――』（法蔵館、二〇一三）など、中国浄土教に関する研究書が出版されており学界を裨益している。特にこれらの書はどれも、浄土教という一領域に限定されたものではなく、前代や同時代の中国仏教の動向を広く見渡した上で、それぞれの浄土教諸師の特色を論じている。

本書著者の吉水氏もこのような大正大学・浄土学の伝統の中で研究活動を進めてこられたと思われる。それと同時に、本書「あとがき」や「著者略歴」によれば、著者は研究活動の一方で、二〇〇九年に若手浄土宗僧侶有志と「社会慈業委員会 ひとさじの会」を発足させるなど、仏教者としての社会的実践にも積極的に取り組んでいることが知

られる。

本書が取り上げる元照は、唐初・南山道宣（五九六―六六七）を淵源とする南山律宗を中興した人物であり、その一方では浄土教関係の著作も多く著すなど、幅広く活躍した律僧である。元照の活躍した宋代の仏教界では、禅・律・浄土・天台・華厳など、一旦は唐代に完成された中国仏教を継承した上で、さらにこれら諸宗の融合的な思潮の中で教学が研鑽されていた。このような時代に生きた元照は、諸宗・諸師との盛んな交流によって自らの思想を形成していったのである。

また元照は、日本仏教を考える上でも重要な人物であることを忘れてはならない。元照の諸著作は鎌倉時代の入宋僧俊芿（一一六六―一二二七）によって日本へもたらされ、北京・南都の両仏教界からも注目を集めた。その中でも『四分律行事鈔資持記』をはじめとする元照の戒律関係著作が南都へ伝わると、律学研鑽の際に重んじられるなど、中世の戒律復興運動の原動力の一つとなった（蓑輪顕量『中世初期南都戒律復興の研究』法蔵館、一九九九年、一〇三頁・二七四頁等参照）。

さらには評者の管見ながら、後に凝然（一二四〇―一三二一）が『八宗綱要』『律宗綱要』等によってまとめ上げる律宗の宗義にも、道宣の立場を大きく進展させている面が見られ、そこにも元照の思想が大きく影響していると考えられる。

また浄土教においては、法然坊源空（一一三三―一二一二）の門流に多く参照された形跡があり、その中の一人、親鸞の『教行信証』にも引用が見られる。親鸞が宋代仏教を受容するにあたっては、この元照が軸になっていたという先学の指摘もある（福島光哉『『楽邦文類』の研究』東本願寺出版部、一九九九年、一八一頁等参照）。

このように日本で当時、最新の中国仏教として認識されていた元照の思想は、戒律と浄土教の中世日本的展開にも多大な影響を及ぼしているのである。

本書の概要

以下に本書の内容を評者なりに要約して紹介していきたい。なお評者は、中国における律僧の動向に関心を持ちつつも、必ずしも著者の専門領域である宋代仏教や浄土教を専門としているわけではない。したがってこの書評も、高度な学術上の議論を目指すものではないことをあらかじめお断りする。しかし、それでも本書を紹介しようとする理由は、新しい宋代仏教の側面が明らかとなり、また本書が課題とする天台や善導系と異なった「律系浄土教」の特色が明確になることを期待するからである。

本書の構成は、本論が全五章から成り、冒頭に「序論」、最後に「総結—律僧元照の浄土教思想の特徴—」が置かれる。また、各章の中の節ごとに「問題の所在」と「まとめ」が置かれていて、読者に論点を把握しやすくさせる配慮がなされている。

序論

第一章　出家修学について—諸宗僧侶との関わりを中心に—

　第一節　問題の所在

　第二節　戒律の研鑽

　第三節　天台教観の修習

　第四節　華厳学派の影響

　第五節　禅僧との交流

　第六節　浄土教の受容

　第七節　まとめ

第二章　浄土教への帰入とその著作
第一節　浄土教への帰入
第二節　著作について
第三章　仏身仏土観
第一節　阿弥陀仏観
第二節　極楽浄土観
第四章　実践行
第一節　往生行について―信願行三法具足説を中心に―
第二節　観想念仏について
第三節　持名念仏について
第五章　往生に関する諸問題
第一節　臨終来迎説
第二節　二種の往生思想
総結―律僧元照の浄土教思想の特徴―

序論

序論は「研究の目的」「研究の回顧」「研究の方法」「本論の構成」から成る。「研究の目的」では、律僧元照の浄土教思想の内実と、その戒律と融和した浄土教がいかなる形で展開されているかを考察することが本書の目的であるとまず冒頭で表明される。また、元照の浄土教を見ていくにあたって、「天台・華厳・禅・律等さまざまな教学や修行

を宗とする僧侶、ならびに在家居士等によって併修された」（四頁）という宋代浄土教の特徴を踏まえて考察することの重要性も述べられる。これは例えば唐の善導（六一三―六八一）の浄土教が「純粋専一に浄土教信仰に立脚する者による実践布教」（四頁）であったのと対照的であり、隋唐仏教とは異なった宋代の諸宗融合的な思潮に留意していく必要性が述べられている。

また「研究の回顧」では、中国・台湾・日本の従来の元照研究の動向が精査されている。特に近代の研究のみならず、元照以降の中国南宋時代や日本鎌倉期以降の元照著作の注疏にも注意しており、これらから東アジアにおける元照の歴史的重要性が知られる。

また、日本での元照研究の特色として、明治以前は戒律関係章疏の研究が主流であったのに対して、明治以降は浄土教研究が中心となっているという全体像が示されている。その浄土教研究についても善導浄土教や天台浄土教との関連を考察する研究は多くあるものの、戒律と浄土教との関連を考察する研究が少ないという研究史の傾向を挙げる。また「阿弥陀仏観や念仏観、往生観といったテーマで、一貫した元照の浄土教思想を論じた研究はまだ行われていない」（一七頁）として浄土教研究の課題を指摘している。

第一章　出家修学について―諸宗僧侶との関わりを中心に―

第一章では、諸宗融合思想を基調とした宋代仏教の特色に鑑み、元照の出家や修学における環境や人的交流について考察されている。具体的には戒律・天台・華厳・禅・浄土教にそれぞれ節を設けて検討が為される。特に第六節「浄土教の受容」では、浄土教の系統を廬山慧遠・善導系・天台・禅宗・華厳・戒律僧に分類したうえで、元照の浄土教受容は、遵式の浄土教を基軸としつつも廬山の結社念仏や宋代の天台・華厳・禅・律といった諸宗の浄土教からも少しずつ影響を受けていることを明らかにする。

また、元照の修学は杭州の祥符寺を中心に行われており、この地は道宣の律学を研究する律僧をはじめとする諸宗の人師が自由闊達に議論できる場であったとし、このような環境や人的交流が元照の思想形成の背景にあったことが論じられている。

第二章　浄土教への帰入とその著作

第二章は二節に分かれ、第一節では元照の浄土教帰入の時期や動機について考察され、第二節では著作に関する検討が行われている。いずれも元照研究における基礎的作業であり、著者は先行研究の成果を示しつつ、さらに独自の視点によって考察を進めている。第一節においては、浄土教帰入の内的要因として、道宣の戒律関係著作から影響を受けた末法に対する意識があったとする。また浄土教帰入以前の謗法への深い自覚と懺悔も元照を浄土教へ向かわせた要因として挙げている。

元照の著作の整理・確認を目的とした第二節では、従来の研究が現存著作の整理のみであったという状況をさらに進め、散逸してしまったものも含めて一覧を示し、これと併せて各著作中の浄土教思想の有無を調査している。また、本節後半では特に浄土教関係の著作について、その成立の前後などが考察されている。

第三章　仏身仏土観

第三章は阿弥陀仏観と極楽浄土観との二節に分かれ、仏身・仏土の問題が取り上げられている。仏身論については、先学が天台からの影響を論じていることを再考し、元照の仏身説が菩薩戒を説く『梵網経』に基づいていることを明確にした上で、知礼との共通点や相違点なども考察されている。思慮分別を超えた法身阿弥陀仏を本源に置く三身説によって、有相の仏と無相の仏を阿弥陀一仏の二側面として説明する点に元照の仏身観の特色があるとする。

これに続く極楽浄土観の考察でも、有相・無相が論点の一つとなっている。元照の特色は、有相荘厳の阿弥陀仏の極楽浄土を明示しつつも、それがそのまま唯心己性であるとした点にあるという。また、このような元照の浄土観の背景には、安易な唯心論の立場から唯心無相の浄土以外を認めない学者に対する批判意識があったことを指摘している。

第四章　実践行

本章第一節では、信願行の三法が具足すれば往生できるとする元照の説示に注目して、元照の往生行が考察される。著者は信願行三法具足説が元照の浄土往生行の原則であるという見解を示したうえで、『観経』所説の三福九品の行業や戒律がすべてこの原則に基づいて往生行とされている点を元照の特色として指摘する。さらに、諸行を広く往生行とするこの考え方の背景には、浄土教にさまざまな入口があることを示し、往生を目指す者にとって平生の行業が決して虚しいものにはならないことを示そうとした元照の意図があることが明らかにされている。

続いて、第二節・第三節では元照の説く二種の念仏である観想念仏と持名念仏とが考察される。この二種の念仏は前章で取り上げられた二種の阿弥陀仏観とも相応しており、元照の浄土教実践の特徴的な行業として位置づけられると著者は述べる。観想念仏の考察では、元照の天台諸師への批判内容を整理しながらその特色が考察される。元照は、道宣の理事二懺の説に基づきながら、理と事のどちらを行じても浄土へ往生できると説く。これによって元照は観想念仏を機根の上下に関係なく往生可能な行としているという点などが指摘されている。

持名念仏の考察では、従来の研究が「善導の影響を受けている」という漠然とした意識で考えてきた傾向があることに問題提起し、元照が「称名」ではなく「持名」とすることの意義を考えていく必要性などが述べられる。その上で第三節では元照の持名念仏説の特徴として、①聞持名号説、②四字名号説、③十声十念説、④本願念仏説、⑤念仏

平等往生説、⑥念仏多善根説があるとし、このうち③④を除く四点は、中国宋代浄土教の中で、元照がはじめて明示したものであるとする。

第五章　往生に関する諸問題

第五章第一節では、臨終来迎説が取り上げられる。来迎説に関しては元照の批判対象だったと考えられる永明延寿の来迎説を主に検討したうえで、元照の臨終来迎説が明らかにされている。延寿が「唯心」を強く主張して実質的な他方仏の存在を認めない傾向があるのに対して、元照は広大な衆生の心中において固有の阿弥陀仏の存在を認め、同じく心中の衆生のもとへ仏が来迎することを説いているとする。他にも、来迎をめぐっては正念来迎か来迎正念かについても両者の考え方に相違があることなどが指摘されている。

第二節では元照の二種の往生思想が考察される。二種とは、死せずして心が往生するという未死の往生と、臨終を迎えて後に往生するという臨終往生である。このような二種の往生の解釈を行っている者は中国宋代の浄土教者の中になく、元照の浄土教思想の特色の一つであると著者は述べている。

おわりに―戒律と浄土教をめぐる本書の意義―

以上、簡略ではあるが全五章を概観した。本書が明らかにした元照浄土教の特色とは、単に天台浄土教や善導浄土教を踏襲したものではなく、それらの影響を受けつつも独自に構築された「律系浄土教」であるという点である。このような「律系浄土教」という枠組みに関する問題や、戒律と浄土教の接点を探る考察は、本書の視点や研究目的として一貫しており、これまでの仏教学や中国仏教研究の分野においてあまり注意されていなかった斬新なテーマである。そもそも罪深い者への救いを説く浄土教と、罪を戒め生活を律する戒律とは、仏道において一見相容れない性格

があると見られる。しかし、どちらも仏説であり、両者をどのように考え、両立させていくかは仏道にかかわる全ての人の課題でもある。元照の生涯や著作活動、そして思想と実践は戒律と浄土教を併修することの重要性を示したものであり、この点において本書の研究課題は単なる一時代・一人物の思想を解明するにとどまらない大きな意義を有するものといえる。

このような元照の律系浄土教者としての特色について、従来の研究は①『四分律行事鈔資持記』の瞻病篇（道宣の『四分律行事鈔』瞻病送終篇の注釈箇所）の記述を中心とした浄土教的臨終行儀、②菩提心と三聚浄戒をもって説明される『観経』の三心釈、③極楽往生を目的とした受戒、という以上の三点のみであったと著者は述べ、これらは元照を律系浄土教者として位置づけるには十分ではなかったとする。そこで元照の思想や実践をより広く見ていくことによって、この課題の解決を目指している点が本書の大きな特徴である。

このような視点や立場から著述された本書には、随所に戒律や南山律宗との関連に言及する箇所が見られる。以下にいくつか例を挙げていきたい。まず序論では元照の浄土教が法然門下に注目されていた理由として「生前の法然が戒律堅固でありながら口称念仏による浄土願生を説いている点をもって、元照と法然を重ね合わせて考えたこと」（一一頁）を指摘している点が興味深い。元照の浄土教は当時最新の中国仏教だから、あるいは当時の中国浄土教の主流として考えられていたからだという理由は、従来から指摘されていたことであるが、本書の「研究の回顧」によって日本側から見た新たな元照像が浮かび上がっている。

また第二章では、元照の実践が末法という危機意識に基づくものであることが論じられるが、その末法観は道宣の時代認識に影響を受けている点が指摘されている。その上で「元照において戒（律）と浄土教は、およそ仏教を信仰する者であれば、誰もが行ずる必要のあるものと考えていた」（一一五頁）という戒律と浄土教の接点を明確にした上で、二つの修道を共に重んじた元照の実践意識が論じられている。また元照の著作活動の中では、戒律関係著作と行

業記類が多い点について、「そこには南山道宣を思慕し、その著作活動に準じた著述を行う傾向がみられる」（一四四頁）として、戒律面のみならず、仏教史家としての道宣を継承する一面があることも示唆している。

このような道宣から元照へという思想展開に言及した考察は、浄土教の思想や実践を専門的に考察する第三章以降においても、しばしば取り上げられる。たとえば元照の事理二観の理解の背景には道宣の懺悔観の影響がある（第四章第二節第二項）という点は前述したが、他にも持名念仏については、道宣の『四分律刪補随機羯磨疏』における仏名に関する言及との関連が考察されたり（第四章第三節第五項）、往生思想に関しては道宣撰『釈門章服儀』の記載から元照との関連が論じられたりしている（第五章第二節第二項）。

道宣は戒律・経録・史伝・護教（三教論争関係）など幅広い著作活動を行ったことは広く知られているが、その諸著作の中で浄土教の思想や実践に言及する箇所となると、極めて限定される。したがって浄土教者としての元照を、道宣との関係で見ていくことは極めて困難な作業であったことが想像できる。しかし本書著者は道宣著作への調査をも行いつつ、その影響関係を論じている。そして、このことが元照の浄土教思想を「律系浄土教」として位置づけていく際の大きな説得力へとつながっている。

思うに宋代の仏教界は、諸宗や諸学僧の盛んな交流の中で、多くの思想・学説が飛び交い、この時代に身を置いた諸師はそのような多くの思想と学説を吸収しつつも、時には批判し、時には会通して、自らの立場を確立していったのであろう。したがってこのような時代の一人物の特色を見定めようとするにも、さまざまな思想背景を考慮しなければならず、これがこの時代の研究を困難にする原因の一つとなっている。もちろんどの時代、どの地域の仏教を研究する場合においても、背景の考察は必要であろうが、とりわけこの時代の思想背景の究明は困難なのである。しかし本書著者は、そのような困難な状況の中でもさまざまな方面の影響関係に留意して元照の特色を論じており、ここに著者の苦労と視野の広さが感じられる。また同時に、本書を通してあらためて宋代仏教を見ていくと、単なる「隋

唐仏教の継承」というような従来の定義を見直していくべき重要な視点が示されたといえるのである。

（二〇一五年十一月刊・法蔵館、A5版、x＋四二二頁、一二、〇〇〇円＋税、ISBN 978-4-8318-7360-6）